

公開講演会記録

プロトコール（国際儀礼）を 知ってニュースを観る

結び文化研究所長 小暮幹雄



前回は、「結びの歴史と文化」についてお話をいたしました。本日は、「プロトコール（国際儀礼）を知ってニュースを観る」と言う演題でお話をさせていただきます。

始めに、プロトコールのお話をする前に、私が国旗について興味を持ったきっかけを実際に経験したことでお話いたします。私は少年時代からボーイスカウトの団員として活動をしておりました。ボーイスカウトの集会では、始まりと終わりのセレモニーで、国旗に対する敬礼をしておりました。そして、国旗ポールへの国旗の掲揚・降納の仕方も教わりました。1964年10月10日から2週間にわたって第18回オリンピック東京大会が、代々

木の国立競技場ほかで開催されました。参加92か国の国旗を明治神宮の絵画館前に掲揚するのを、ボーイスカウト200名ほどが担当しました。当時私は大学1年生であり、全体の指揮をする立場にありました。参加各国のポールにはボーイスカウト2名が正手、副手となって、開会期間中、毎朝掲揚し、夕方に降納をいたしました。9月上旬には、事前訓練として、行進の仕方や、整列待機、国旗の持ち方、たたみ方、そして、参加国の国旗が同時に同じ速さで掲揚・降納できるように何回も練習をしました。

また、9月中旬には、国立競技場にて開会式での入場行進の予行演習があり、ボーイスカウトに見物の機会を与えられ、私も見物しました。参加各国のプラカー

ドと国旗は、防衛大学の学生が奉持しました。参加各国の選手団はまだ来日していないので、選手団の人数分の距離を空けて次の参加国のプラカードと旗手が行進する形でした。セイロン（現スリランカ）のプラカードがメインスタンド前に差し掛かったときに、すぐ後ろを行進している旗手の国旗が逆さまにポールに取り付けられているのを私は発見し、そのことを直ちに本部へ注進しました。本部の方はすぐに国旗の本で調べて、逆さまであることを認めました。これを機に、私の国旗への関心が一段と高まりました。さて、本題のプロトコールとは何かと申しますと、「国家間の儀礼上のルールであり、外交を推進するための潤滑油。また、国際的・公式な場で主催者側が示

すルールをさすこともある」と外務省は規定しております。

また、「プロトコールは国際的交流の場でお互いに共通理解を持ち、国際間の友好を高めるためのものであり、公的な行事を企画・立案・実施する場所で主催者側が必要とするルール」でもあります。プロトコールには5つの原則があります。

まず、序列（席次）の重要性、次に、答礼・相互主義、3番目は、右上位（向かって左側）の原則、4番目は、異文化の尊重、そして、レディー・ファーストの原則です。

①序列（席次）の重要性ですが、誰がどの席に着くか、あるいは立つかが大変重要です。2か国以上の国際会議での座席や接遇では、地位や役職に応じた席が保証されます。

②答礼・相互主義については、2か国間で主催国が歓迎晩餐会をしたならば、来賓国は別途、答礼の晩餐会を設けることになっております。

③右上位（向かって左側）の原則では、人の立ち位置や国旗の配置では、右側が常に上位（向かって左側）です。

④異文化の尊重とは、国際間ではそれぞれの国の歴史や文化・慣習が違いますので、そのことを尊重して儀礼を行います。

⑤レディー・ファーストは、行動において、常に女性を優先することを大切にします。

敬称について

次に、敬称についてお話いたします。国際儀礼上の敬称には、王族（皇族）の敬称と高位高官の敬称とがあります。

日本の皇族の敬称では、日本の天皇・皇后に対しては陛下を用います。皇太子は殿下、皇太子妃は、妃殿下を用い、以下、男子皇族は殿下、女子皇族は妃殿下です。さらに王、王妃も用います。

外国の王族の敬称としては、元首とその配偶者、および元首直系の王族とその配偶者は、His (Her) Royal Highnessを用います。His (Her) Royal Highness 以外の王族一般は、His (Her) Highnessを用います。

外国の王族に対する呼びかけは、最初に Your Royal Highness で、その後は Sir (Ma'am) となります。

敬称の対象、呼びかけ、宛名、起句など

(1) His Majesty (Her Majesty)

王族元首に対しての呼びかけは、最初に Your Majesty で、その後は Sir (Ma'am) となります。

(2) The Right Honourable と The Honourable

The Right Honourable は英国貴族、枢密顧問官、首相、各省大臣、総督、英連邦首相、大市長などに用います。米国では自国大使、公使、各省長官、州知事、市長、上下連邦および州の議長、議員、最高裁判所長官、および判事に対して用います。

Honourable は、通常、肩書または肩書+姓で呼びかけます。例として、大統領は Mr. President と、首相には Mr. Prime Minister と呼びかけます。ニュースでは新聞記者がこのように呼びかける場面を見ることがあります。

(3) Sir と Lady については、英国の1代限りの貴族 (Knight)、女性 (Dame) に対して用います。男性に対する呼びかけは、Sir+ファーストネーム (Sir Mikio)。女性は Lady+姓 (Lady Kogure) で呼びかけます。

(4) Mrs. と Ms. については、Mrs. は既婚夫人に対する一般的な敬称であります。Ms. は未婚、既婚に関わらず使えます。呼びかけは、Mrs./Miss/Ms.+姓で呼びかけます。

(5) Dr. の呼びかけについて。医師に対する一般的な呼びかけは、Dr.+姓

(Dr. Kogure) です。

(6) 封筒の宛名書きについては、フルネーム＋取得学位略文字で表します。

医師一般に対しては、Kogure, M.D. (Doctor of Medicine)、獣医師は、Kogure, D.V.M. (Doctor of Veterinary Medicine) と書き、歯科医は、Kogure, D.D.S. (Doctor of Dental Surgery) のように書きます。

Professor について。学者（博士号取得者）に対する呼びかけは、Dr.＋姓、あるいは Professor＋姓を用います。

また、封筒の宛名書きは、学位の有無により異なります。Dr.＋フルネーム＋取得学位、あるいは、Prof.＋フルネーム（学位なし）を用います。

軍人に対する呼びかけは、国ごとに、また、陸軍・海軍・空軍、海兵隊によって異なり、基本的には肩書 (General, Colonel, Lieutenant など) を用います。聖職者に対する呼びかけは、宗教、宗派によって異なります。

基本的には、英国教会は Archbishop, Bishop などの肩書を用い、カトリックは、Cardinal, Bishop, Father, Sister などで呼びます。プロテスタントでは、Bishop などを用います。また、ユダヤ教は、Rabbi などです。因みに、日本の

プロテスタントの聖職者は、牧師。カトリックの聖職者は、神父の敬称を用いています。

ローマ法王 (Pope) に宛てる手紙の宛名は、His Holiness The Pope と書きます。そして、口頭での呼びかけは、Your Holiness と呼びます。

枢機卿 (Cardinal) に宛てる手紙の宛名は、His Eminence です。呼びかけは、Your Eminence です。大司教 (Archbishop) に宛てる手紙の宛名は、His Excellency です。Your Excellency または Archbishop＋姓で呼びます。司教 (Bishop) に宛てる手紙の宛名は、The Most Reverend＋フルネームと表記し、呼びかけは、Your Excellency または Bishop＋姓で呼びます。

上記以外のカトリック高位聖職者には、The Right Reverend Monsignor＋フルネームを表記し、Monsignor (のみ) または＋姓で呼びます。

カトリックの神父 (Priest) に宛てる宛名は、The Reverend＋フルネームで表記し、Father (のみ) または＋姓で呼びかけます。

シスター (Sister) に宛てる宛名は、Sister＋フルネームで表記し、呼びかけは、Sister (のみ) または＋ファースト

ネームです。

握手について

握手については、外国人と握手を交わす場合には、お辞儀をせず背筋を伸ばした姿勢で、お互いに右手で相手の手の平を深く握り、相手の目を見つめて数回上下に軽く振ります。親しい間柄では、お互いの右手の親指を握るようにします。握ったまま腕を持ち上げる場合もあります。男性が女性と握手を交わす場合には、女性が先に手を出してから男性は女性の右手の親指以外の4本の指を優しく握ります。男性が先に手を出したり、深く強く握るのはタブーです。

握手は原則として、異性間では、婦人から男性へ、同性間では、目上の者から目下の者へ、先輩から後輩へ、既婚者から未婚者へ、年長

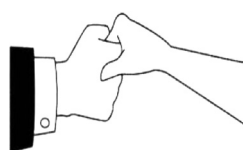
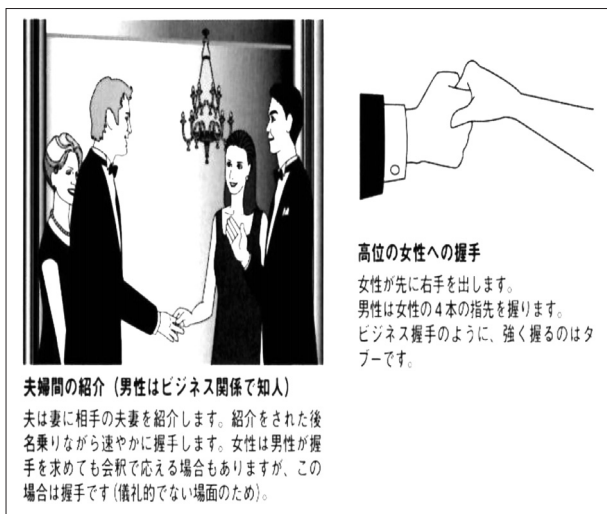


ビジネス握手＝指先を握るのではなく親指を深く差し込みます。



アビール用握手＝トップリーダー同士の間で強い握手。聴衆に見えるように持ち上げています。

握手の姿勢は、背筋を伸ばし、お辞儀はしません。親善や友好の証の両手握手でも、実際には時間差攻撃をしています。相手の右手をキャッチ、即座に自分の左手を相手の右手の上にのせています。



高位の女性への握手

女性が先に右手を出します。
男性は女性の4本の指先を握ります。
ビジネス握手のように、強く握るのはタブーです。

夫婦間の紹介（男性はビジネス関係で知人）

夫は妻に相手の夫妻を紹介します。紹介をされた後名乗りながら速やかに握手します。女性は男性が握手を求めても会釈で応える場合もありますが、この場合は握手です（儀礼的でない場面のため）。

者から年少者へ手を差し出します。

序列（席次）について

序列（席次）については、公式席次と儀礼席次があります。

公式席次は、一般的な基準であり、国によって異なる場合があります。

外交代表の席次も国や行事によって異なる場合があります。

王族元首の席次に関しては、即位した順と決められています。王族皇太子、その他の王族の順に席が決められます。王

族以外の元首（大統領）はやはり就任順となります。

元（ex）元首（元大統領）は過去の就任順です。首相も就任順であり、次が、元（ex）首相であり過去の就任順となります。

国会議長、最高裁長官、閣僚（通常は外務大臣が筆頭）の順が席次です。

外交代表の席次は国や行事によって異なる場合があります。

大使は、信任状奉呈順（1961年のウィーン条約で決められています）と席次が決められています。外交団長（各国大使の中の筆頭）は通常、着任最古参が務めています。カトリック国では、バチカン（法王庁）大使が筆頭です。

儀礼席次

民間の政・経・財界人、文化・学界、芸術家などの席次を決めるのは困難です。

儀礼席次の決め方の原則。

- ・ 年齢順で決めます。
- ・ 社会的地位で決めます。
- ・ 同じランクでは外国人に自国人より上席を与えます。
- ・ 同じランクでは初めて招待された客が、過去に何回か招待された客より上席とします。

・ 「元」肩書の人は、同じ肩書の現職より後の席となります。

・ 聖職者は宗教行事など聖職者に特別の重要性を持つ行事においては優先されます。

・ 貴族や爵位が高い方は、爵位を授与された年次順で席次が決まります。

・ 叙勲者。特別な勲章や名誉賞を受賞した人には特別な配慮をする必要があります。

・ ホストとの関係。客同士が同じランクの場合は、外国人が優先されます。

団体、多国籍機関のメンバーの順序

（1）国連

国連総会では、毎年席割を事務総長が籤引きで決めることになっています。

議長より見て最前列右から国名のアルファベット順に席が割り当てられます。

安全保障理事会では、馬蹄形テーブルに、議長を中心に左回りに国名のアルファベット順に席が決められます。そして、月ごとに1か国ずつ右隣に席を移動することになっています。

議長は右隣には事務総長が座ります。

（2）G7やG20

座席はその年の議長国により異なります。議長を中心に右・左交互に大統領就

任順、首相就任順に席が割り当てられます。

(3) EU

メンバー国の自国語による国名のアルファベット順で席が決められます。

(4) オリンピック

開会式入場行進では、古代オリンピック発祥の地のギリシャが常に先頭で入場します。次いで参加各国は、開催国の言語によるアルファベット順で入場し、最後は開催国が入場することが決められています。

日本の席次（一応の目安）

戦前は「皇室典範」で宮中席次が決められていました。現在では、公式席次は定められていませんが、一応の目安として、次のようになっています。

- (1) 皇族
- (2) 内閣総理大臣
- (3) 衆議院議長
- (4) 参議院議長
- (5) 最高裁判所長官
- (6) 元内閣総理大臣（年齢順）
- (7) 元衆議院議長（年齢順）
- (8) 元参議院議長（年齢順）
- (9) 元最高裁判所長官（年齢順）
- (10) 外国特命全権大使（着任順）

(11) 野党党首

(12) 与党副党首

(13) 国務大臣、衆議院副議長、参議院副議長、最高裁判所判事（長官代行）（年齢順）

(14) 最高裁判所判事（任命順）

(15) 経済・財界・文化・教育・マスコミ・国際協力分野の団体長（年齢順）

(16) 内閣官房副長官、副大臣、内閣法制局長官、国立国会図書館長、衆議院議員、参議院議員、衆議院事務総長、参議院事務総長、最高裁判所事務総長、宮内庁長官、侍従長、特命全権大使、その他の認証官（年齢順）

(17) 都道府県知事（連合組織の定める順）

(18) 都道府県議会議長（連合組織の定める順）

(19) 事務次官

上位席について

国際儀礼では、右上位（向かって左）が原則です。これはキリスト教社会の伝統に基づくものですが、日本では、古来、中国の伝統にのっとり、左が上位でした（例・左大臣、舞台の上手）。しかし、明治維新の西欧化にともない、右上位が定着しました。

(1) 自動車

自動車の上位席の基本は、乗り降りしやすい（後部座席）車寄せに近い席です。職業運転手がいる右ハンドルの車のときには、原則として、後部座席で、運転手の後ろの席が上位席です。

左ハンドルの車の場合には、後部座席で、運転席の最右側の席が上位席です。友人や同僚などが運転する車の場合には、運転席の隣の席（助手席）が上位席となります。

(2) エレベーター

乗るときは上位者が先に、降りるときには、案内人が先に降ります。ただし、エレベーターの降り口で出迎え者が待っている場合には上位者が先に降ります。

(3) 歩道を歩く

上位者を自分の右側にして歩きます。自分は車道側を歩き、上位者は建物に近い側を歩くようにします。男女が歩く場合には、女性を建物側にし、男性は車道側を歩きます。

(4) 室内の上位席

・日本座敷
日本座敷では、床の間に近い場所が上位席です。

・洋室の場合
① マントルピース（暖炉）があれば、そ

の前が上席です。
②庭などの眺めがよい席は上位者に与える場合が多いです。

③レストランなどで、壁を背にした長椅子席は上位者に譲ります。

④応接セットでは、長いソファの右側が上席です。

⑤宴席では、ホストの右が女性No.1、左が女性No.2、ホステスの右側が男性No.1、左側がNo.2、以下右No.3、左No.4……。⑥出入り口近くやキッチン近くは末席となります。

国旗について

日本の国旗は近年までデザインとしての詳細が統一・確定されていませんでしたが、国旗（日章旗）と国歌（君が代）は、1999年8月13日の法律第127条（略称「国旗国歌法」）で初めて標準としてその詳細が決められ、即日施行されました。

寸法は、縦が2に対して、横は3の割合です。日章は対角線の交点を中心として、円の直径は縦の5分の3です。地色は白、日章は紅と規定されています。

因みに、国際連合方式では、国旗の縦横のサイズは、縦2対横3となっています。複数の国の異なる縦横比の国旗の場合、

合、国連方式の2対3に併せてよいかどうかを先方に照会し、了承が得られればサイズを直して併掲します。

国旗の取り扱い

・国旗は、国家国民のシンボルなので、汚れたり破れたりしていけないものを使用します。

日本国旗のみを掲揚の場合には、野外では門外から観て左側に、壇上では向かって左側に掲揚します。

・掲揚の場合には旗竿（ポール）の旗の上辺が最上部に接するようにします。

・三脚使用や行進の場合には、床面や地面に触れないように配慮します。

・国旗は原則として、日の出（または始業）から日没（または終業）まで掲揚します。

・原則として、雨天、荒天では野外に掲揚はしません。

「国旗及び国歌に関する法律」で正式に日章旗が日本の国旗と制定された後も、日本の国旗について細かい取り扱いに関する立法上の規程があるわけではありません。しかしながら、日本では刑法第92条で外国の国旗・国章に関する「外国国章損壊罪」を規程しており、日本国内の外国大使館など公的な国旗・国章の場合

に限っては、損壊に関して刑罰が科せられることになっていますので、国際的な場においては、自国の国旗に対しても、相手国の国旗に対しても、同じように敬意を払わなくてはなりません。

日本国旗と外国国旗の併掲

（1）最新のサイズのものを使用します（図柄、図柄の位置を確認のこと）。

米国旗は星の部分が向かって左角になるように掲揚します。サウジアラビア国旗は、刃先が向かって左向きになるように掲揚します。

（2）自国国旗

外国国旗を掲げるときは、自国国旗も掲揚するのが原則です。

外国公館では自国国旗のみの掲揚が認められています。

（3）掲揚

2か国の国旗を同時に掲揚する場合には、同じ大きさ、同じ高さに掲揚します。1本のポールに複数の国旗の掲揚はしません。

（4）国旗位置

2か国の国旗を掲揚する場合には、旗に向かって左側が上位です。通常、日本に外国客を迎えた場合には、儀礼上、外国国旗を日本国旗に向かって左に掲げます。

(5) 国旗と国旗以外の旗の掲揚
国旗を上位とし、最初に掲揚し、最後に降納します。

(6) 各国国旗
国際会議では、参加各国の英語名のアルファベット順に配置します。

(7) 国旗掲揚の際の姿勢
起立して姿勢を正し、国旗に向かい敬意を払います。軍服以外の男性は脱帽します。米国式に、掲揚の間、右手を左胸に当てる国もあります。

縦長に掲揚する場合

国旗を縦長に掲揚する場合には特に注意を要します。アメリカ合衆国国旗の場合には、星の部分（カントンといいますが向かって左上部にくるようにします。旗としては裏側が表になります。カナダ国旗の場合には、楓の先端が向かって左側にくるようにします。

国歌

正しい国歌を演奏します。
外国の賓客を迎えた公式行事では、相手国国歌を先に、自国国歌を後に演奏します。

日本の国歌は、1999年8月13日の法律第127条（略称「国旗国歌法」）

で初めて「君が代」が国歌として正式に決められ、即日施行されました。

通常、どの国の国家が演奏される場合でも、起立して姿勢を正すのが礼儀です。

弔旗・半旗 (half-mast)

① 弔意を表す場合には、半旗とします。
一端最上部まで揚げてから、上げます（どこまで上げるかの規定はありませんが、通常は、ポールの中間に旗の上辺がくるまで上げます）。

② 室内掲揚

半旗の代わりに、旗竿の竿頭の球を黒布で包み、旗の最上部から黒リボンを下らすこともあります。

③ 外国国旗は、その国の許可がない限り、半旗にはしません。

私が2016年3月7日に、客船「飛鳥II」でハワイへ上陸した際に、港には米国旗（星条旗）とハワイ州旗が半旗になってのを見ました。調べたところ、レーガン元大統領夫人のナンシーさんが逝去されたために弔意を表しているとのことでした。

卓上旗

日本国旗と外国国旗を卓上に置く場合も、国旗掲揚の原則に準じて置きます。

車旗

国家元首や外国大使が公務で乗車の場合には、国旗または国旗と大統領旗などの両方を付けます。

CURTSEY（カーテシー、跪礼）

跪礼とは、主として婦人が行う立礼の一種で、最大限の尊敬を表わすための敬礼方式です。男性が跪礼を行う場合には神前や高僧の前でしますが、婦人の場合には、皇帝や皇后、皇族に対してもカーテシーを行います。

宮廷の特別な儀式の場合には、元首に対して行う厳かな跪礼は、左足の後ろに右ひざを入れて深くひざまずきます。普通、高貴な方に対して行う跪礼は、左足（右足の人もある）を後方に引いてひざまずく程度での動作でよいとされています。このとき、同時に右手を差し出して握手をします。また、和服着用の際にはしないとされています。

礼砲

礼砲は、各国とも海軍規則と国際規約によって規定されており、答礼砲を発することのできる港湾との間に交換されるものであります。礼砲の交換は、国家と国

家との敬礼交換と同意義であり、国家間の敬礼方式の一つで、要人の公式訪問、軍艦の公式来航などの際に、敬意を表すために発する空砲を言います。礼砲の数については、次のように定められています。

君主、大統領、皇族に対しては21発、副大統領、首相、国賓に対しては19発、大使、大将对しては17発、公使、中将对しては13発、代理大公使、総領事、少将に対しては9発、領事、大佐に対しては7発。

因みに、21発の礼法のことを、National Salute または Royal Salute といいます。ウィスキーの21年物に Royal Salute というものがあります。

礼砲を最初に発するのは、来航の外国軍艦であります。礼砲発射中は、軍艦のマストには入港国の国旗を掲げ、入港地軍官憲は、来航の外国軍艦に対して、礼砲を発して答礼とします。

もし、外国軍艦に元首か、礼砲を受ける皇族が大使が乗っている場合には入港地の軍官憲から最初に礼法を発します。この場合には、来航の外国軍艦からはこの礼砲に対して、答礼の礼砲発射は行わないことになっています。

ドレス・コード (dress code)

服装指定のことをドレス・コードといいます。国際儀礼でのパーティーの招待状には、ドレス・コードが記されていることがほとんどです。通常、女性の服装は男性と同格のものを着用します。

近年、服装は簡略化し、男性は礼服（燕尾服、モーニング・コートなど）を着る機会はほとんどなくなりました。多くの場合、平服（ラウンジ・スーツ）か、かしこまった行事でもダーク・スーツで十分です。女性については、その昔は、「ローブ・モンタント」「アフタヌーン・ドレス」「カクテル・ドレス」「イヴニング・ドレス」など、一日の時間帯や行事の格に応じて、ふさわしい服が細分化されていました。現在では、色、デザイン、素材など多種多様な選択が通用しています。多くの場合、昼間着用する服（デイ・ドレス）、夜の食事に着用する服（ディナー・ドレス）だけ区別しているのが現状です。

ドレス・コードの目安

男性

昼の正礼装はモーニング・コート。昼／夜の略（礼）装は、平服もしくはダーク・スーツかラウンジ・スーツ。夜の正礼装は、ホワイト・タイ（燕尾服）。夜の準礼装はブラック・タイ（タキシード）。

ド）。

女性

昼の正礼装はアフタヌーン・ドレス。昼／夜の略（礼）装は、平服（ワンピース／スーツなど）。夜の正礼装は、ロングイヴニング・ドレス（ヒール丈、または、トレーン丈）。夜の準礼装は、セミイヴニング・ドレス、または、ディナー・ドレス（くるぶし丈、または、ヒール丈が正式）。

一般的な注意

場違いでない服装をするためには、次のような注意が必要です。

(1) TPO

TPO (Time, Place, Occasion) により判断します。

T 午前、午後、夜などで判断します。

P かしこまった場所か、気軽な場所か、保守的か開放的かなどの土地柄で判断します。

O かしこまった行事か、カジュアルな行事かで判断します。

(2) ドレス・コードが不明の場合

ドレス・コードが不明の場合には、主催者に照会します。特に王族、高僧が臨席する行事では、予め主催者側にドレス・コードを確認しておく必要があります。法王に謁見する場合、女性は胸、腕など

の肌が隠れるような服、ベール着用、アクセサリーは真珠が望ましいなど。一般的には、ホストに礼を失いたいために、ドレス・アップの方がドレス・ダウンよりも無難です。

(3) 祝儀、不祝儀での服装

結婚式で女性の参列者は花嫁衣裳と競合する白は通常は避けます。外国での不祝儀では、黒以外の地味な色やデザインのものでよいとされています。

(4) 民族衣装(和服)

ドレス・コードに「ナショナル・ドレス」と書かれている場合には、和服で通用します。

男性の場合は、紋付、羽織、袴。女性の場合は、無地、付下げ、訪問着、色留袖の中から適切なものを選びます。黒留袖は座ると上半身が黒一色になるため、社交の席では、より華やかな色留袖が好まれます。平服と指定されている場合でも、通常は「つむぎ」や「おめし」は着ません。

紋については、「五つ紋」「三つ紋」「二つ紋」などの格付けがありますが、今では、かしこまった席でも「一つ紋」でもよいとされています。

(5) そのほかの注意すべき点

かしこまった席で着るダーク・スーツ

は黒背広ではなく、「黒っぽい」色の背広のことです。

男性は肌が見えない長い靴下を履きます。帽子は、室内では脱ぎます。最近、コンサート会場やレストランで、あるいはパーティー会場、教会やチャペル、仏教寺院などで着帽のままの方を見かけることがあります。常識を疑われます。国の内外を問わず、宗教施設では、タック・トップ、ショート・パンツなど肌を露出した服装は不適切です。

最近特にパーティー会場などでよく見かける光景は、男性がズボンや上着のポケットに片手や両手を入れている姿です。これなどは決してよいマナーとはいえません。また、すぐに腕組をする癖の方がいますが、これなども傍から見ると横柄に見えるので、避けたい行動です。

勲章について

勲章、褒章は、国家または公共のために優れた功績を挙げた人に元首から授与される名誉の印です。その取り扱い「勲章等着用規程」に沿って着用します。勲章などは国や地方公共団体主催の行事、長寿祝賀会、結婚式などの祝事に着用します。勲章は、燕尾服(女性はこれに相当する服装)、制服に着用するのが原則

です。勲章の種類に応じて、モーニング・コートや平服に着用してもよい場合についても規程があります。

日本の勲章と外国勲章を合わせて着用する場合は、①日本の勲章、②外国の勲章、③日本の褒章または記章、④外国の記章の順が原則です。ただし、外交上、外国の勲章を上位に着用する場合があります(例・外国元首のための宮中晩餐会、外国大使主催の行事など)。

(2018年11月1日・公開フォーラム)

筆者略歴(こぐれ みきお)

1945年東京都中央区生まれ。1968年明治学院大学社会学部社会学科卒業。2008年結び文化研究所所長・主任学芸員(自称 結びの伝道師)。2006年The International Guild of Knot Tyers (IGKT) 日本人会員第1号。2010年日本結び文化学会会員。2011年NHK文化センター講師、読売・NTV文化センター講師、産経学園講師。2012年社団法人青少年交友協会講師、えびす大学講師、客船「飛鳥II」船上講師。